芸術の改革つづき

美術教育の萌芽は、１９０２年の新教育制度の図画科に始まるが、最初の美術専科学校は、1911年、**劉海粟**（りゅうかいぞく）らによって創立された上海美術院である。その後、全国に専門学校が建てられていった。学校には中国と西洋の美術家が集められ、学生に、中国美術と西洋美術の探求、交流、そして、両美術の融合のための自由な空間を提供した。

20世紀前半の中国の芸術の中心は、北京と天津地区・上海と杭州、南京地区・広州地区の三地域であった。北京は伝統勢力の本拠地であった。**蔡元培**（さいげんばい）は北京大学校長の時、書法研究会、画法研究会を創り美育を普及させた。中国初の北京の国立芸術専門学校では、日本や欧州に留学した芸術家たちが伝統の改革のために働いた。

上海は中国現代化の坩堝（るつぼ）であった。美術学校、美術団体が大量に出現し、出版事業が発達した。芸術市場も活発で、全国から名家が集まり、蘇州、揚州、杭州に代わって、全国一の芸術の中心地となっていった。

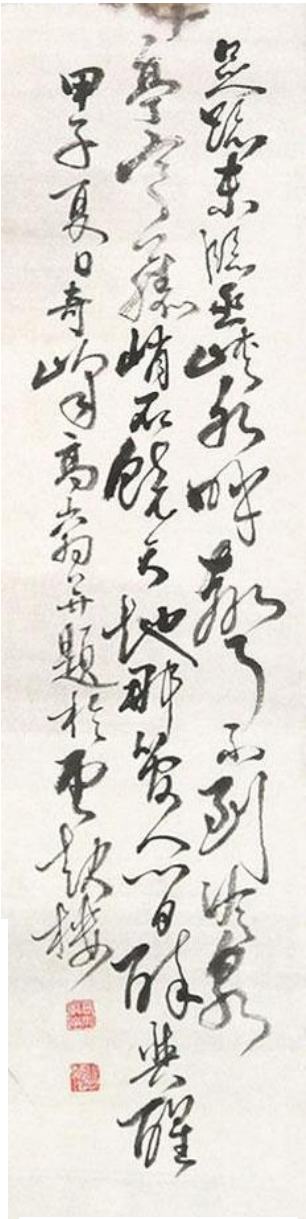
広州は西欧との海上貿易交通の要所であり、流行の最先端にあった。**高剣父**（こうけんぷ）の新国画運動は西洋絵画を手本にして中国画の伝統を改革しようとした。

高剣父（こうけんぷ）（１８７９－１９５１年）名は崙、剣父は号、広東省番禺県の出身。嶺南派（れいなんは）の父といわれる。新文人画を提唱した（伝統的中国画と日本洋画との融合）。近代的リアリズム絵画を樹立した。

日本に留学して、白馬会などで日本の洋画を研究、さらに、竹内栖鳳や山元春挙ら、京都の日本画家の影響を受けた。書は、乾筆（かっぴつ）が特徴。

高剣父　行草書　「當以大自然為師」

高剣父「烟江畳嶂図」



題と落款部分

高奇峰「猿」

高奇峰（こうきほう）（１８８９～１９３３年）嶺南派の代表。高剣父の弟。17歳のとき兄と日本に留学。西洋画の色彩学と光学理論を中国画に取り入れた。

上海で審美書館を興し、絵の雑誌を出版した。

陳樹人「竹」

陳樹人（１８８３～１９４８年）

嶺南派の代表。政治家、画家。日本に留学。京都芸大に入学し、山元春挙から日本画を学んだ。帰国し、広東で国画の教師などをする。その後、日本に亡命し立教大学で文学士の学位を取る。政治活動をしながら、国内各地で個展を開催している。

林風眠

林風眠（１９００～１９９１年）

広東省梅県出身。

１９２０年フランスへ絵を学ぶため留学。中国と西洋芸術の融合を初めに唱えた。

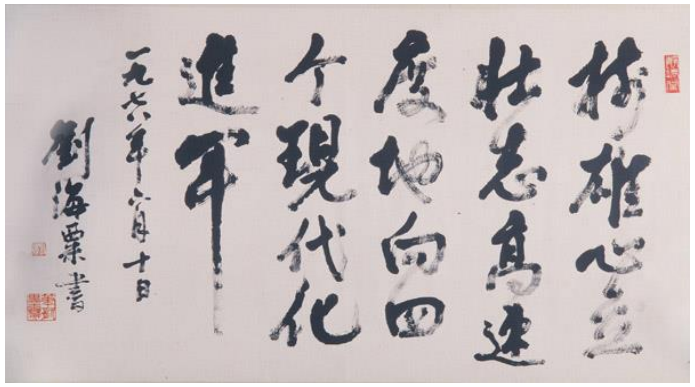
高剣父・高奇峰・陳樹人は「嶺南の三傑」と呼ばれている。

劉海粟（１８９６－１９９４年）

常州出身、号は海翁。上海図画美術院校長。近代美術教育の父と言われる。

西洋の野獣派や後期印象派の影響を受け、ピカソやマチスとも知り合い、ゴッホを目標としていた。

１９１４年中国で初めてモデルを使って描くこと提唱した。「黄山派」。雑誌『美術』を創刊。



劉海粟「行書十八言」1978 年　80×142 ㎝

劉海粟「光明頂速写」1982 年　68×138 ㎝　国画

劉海粟「黄山始信峰」1954 年　74×60 ㎝　油画

呂鳳子（１８８６～１９５９年）

国画家。美術教育家。

江蘇省丹陽の出身。

羅漢像を多く描いている。

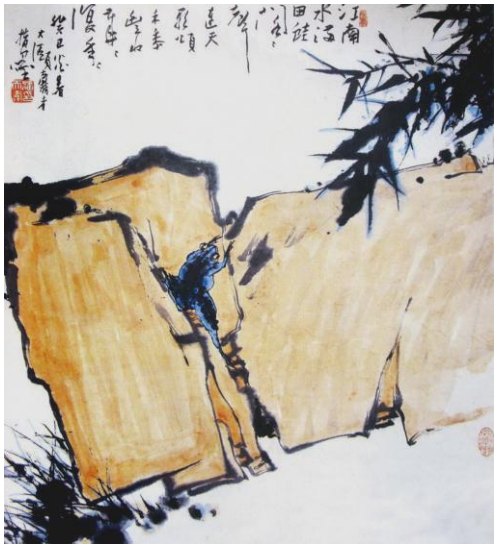
呂鳳子　羅漢像

呂鳳子　耕作図

徐悲鴻「田黄五百壮士」油絵　1928～1930年　197×349㎝

徐悲鴻「八哥鳥」

潘天寿　「紅蜻」



潘天寿　「江南水満」

潘天寿（1897～1971年）

浙江省寧海の出身。画家、美術教育家。杭州の国立芸術専科学校校長などに就任した。1929年と1963年に来日。文革で迫害され亡くなった。

呉昌石に大きな影響を受け、八大山人や石涛などにも学んだ。『中国絵画史』、『聴天閣画談随筆』などの著書がある。

徐悲鴻（1894～1953年）

江蘇省宜興の出身。洋画家、美術教育家。洋画だけでなく国画も得意であった。

1917年日本に留学し、日本画を学んだ。1919年から1927年まで欧州に留学し洋画を学び、欧州各国で展覧会を開催した。帰国後は、北京や南京国立中央大学で教授などを歴任し、1949年中華人民共和国成立後は社会主義リアリズム理論による美術教育を推進した。

中国の現代美術は、この人から始まったといわれる。斉白石や張大千を認め、援けた。

徐悲鴻「漓江春雨」

徐悲鴻「蔣碧微像」京博蔵

徐悲鴻「奔馳」

傅抱石「井崗山」

傅抱石「黄河清」1960 年　中国美術館蔵

傅抱石（ふほうせき）（１９０４～１９６５）
江西省新喩の出身。画家。１９３３年日本に留学し、武蔵野美大を卒業。１９３９年帰国後、芸術大学の教授などを歴任。
石涛（せきとう）・梅清（ばいしん）から大きな影響を受けている。「抱石皴（ほうせきしゅん）」は独自の画法。
金陵画派の代表。

黄賓虹　山水　88 歳

黄賓虹（こうひんこう）（１８６５～１９５５）
浙江省金華の出身。画家。
詩書画篆刻に巧みで、海上（かいじょう）画派でもあり、また新安画派でもあった。
中国各地の美術学校で教師となり、出版社で編集なども担当した。
著書に『画談』『黄山画家源流考』『黄賓虹画語録』などがある。

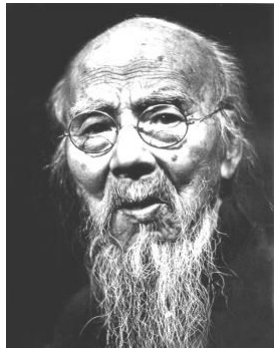
黄賓虹「篆書七言　対聯」83 歳

金城（きんじょう）（１８７８～１９２６）
北京生まれ。一族は浙江省呉興県の出身。ケンブリッジ大学で法学を学んだ。
山水、花鳥、篆刻を能くした。伝統の青緑山水を基に、西洋画の水彩画法などを取り入れている。京派。

金城　「山水図」

陳師曾「山水図」1920 年代　中国美術館蔵

陳師曾（ちんしそう）（１８７６～１９２３）
日本に留学し、東京高等師範学校などで学んだ。北京の美術学校教授に就任。
画家また美術教育者として、北京画壇の重鎮であった。大村西崖との交流が知られている。斉白石を世に出した人。京派。



斉白石（せいはくせき）（１８６３～１９５７）湖南省湘潭県杏子塢星斗塘（こなんしょうしょうたんけん）の出身。

画家・書家・篆刻家。呉昌石とならぶ国画の中心的画家である（「南呉北斉」と称賛された）名は璜（こう）。字は渭清。号は、白石山人、木人、紅豆生、借山翁、寄園、斉大、蘭亭、瀕生、萍翁（へいおう）、三百石印富翁、借山吟館主者などたくさんある。

著書に『借山吟館詩作』『三百石印斎紀事』『白石詩草』などがある。

貧農の家に長男として生まれた。**貧**しかったので教育を受けることができず、少年時代から、牛飼いや柴刈りなどの手伝い、大工見習い、家具職人などをしながら、生活の余暇に、ほとんど独学で書画篆刻を学んだ。

27歳のとき、文人画家胡沁園（こしんえん）の弟子になり本格的に画を学んだらしい。七男五女の父。

１８９５年（31歳）「羅山詩社」を結成。

１８９６年（32歳）書を館閣体から何紹基体に改め、篆隷を学び篆刻を始めた。

白石は１９０２年以降の７年間に５度、中国全土を旅し、中国の自然に触れ、名家の真筆を見た。

１９０２年（38歳）、西安への旅。

１９０３年（39歳）、北京・天津・上海へ。

１９０５年（41歳）、桂林へ。

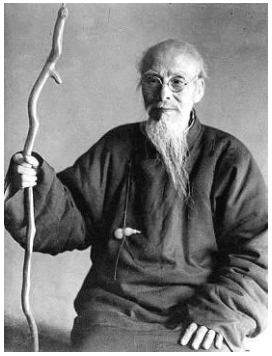
１９０６年（42歳）、欽州へ。

１９０７年（43歳）、再び欽州へ、つづいて、飛泉潭・端渓・東興などへ。

１９０８年（44歳）、広州へ。

１９０９年（45歳）、欽州・香港・上海・南京を旅した。

この旅のことは**「五出五帰」**といわれる。この間、１９０４年～５年には、趙之謙・魏碑を学んだ。１９０６年には八大山人・徐渭・金農などを臨模した。



１９１０年以降の10年は故郷で、読書と詩書画篆刻の制作に没頭。このことは**「家居十年」**といわれる。

１９１７年（54歳）、北京に移住し、絵や印を売って生活しようとしたが、農民出身で木工職人だった彼は、相手にされなかった。しかし、陳師曾が白石の才能を見出し支援した。

１９２２年（59歳）、東京で開催された日華連合絵画展に陳師曾が白石の作品を出典し、白石は世界的に知られるようになる。

１９２０年（57歳）、白石は**「紅花墨葉」**と呼ばれる画風を創出した。

１９２７年（64歳）、国立北京芸術専門学校長であった林風眠に招かれて、同校で絵を教えた。

１９２９年（66歳）、徐悲鴻と交友。その後、北京芸術専科学校教授、中国美術協会主席を歴任した。

１９３０年（67歳）、25歳のイサム・ノグチが８か月間北京に滞在し、白石に学び、水墨画を制作した。

１９３７年（74歳）、日本軍が北京を占領し、白石は家にこもった。

１９４６年（83歳）、南京と上海で個展。徐悲鴻から北平芸術専科学校の名誉教授に招聘された。

１９４９年（86歳）、中華全国美術工作者協会全国委員会委員に選ばれた。

１９５０年（87歳）、「鷹図」と印を毛沢東に贈った。

１９５２年（89歳）、中央美術学院の名誉教授に。「百花と平和の鳩」をアジア・太平洋地域平和大会に贈る。

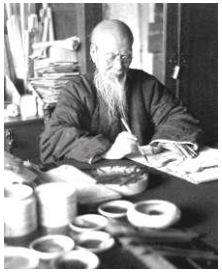
１９５３年（90歳）、「人民芸術家」の栄誉賞状を授与される。中国美術家協会主席、中国文学芸術界連合会第二部全国委員会委員に選出された。彼は、陳半丁・陳師曾・凌文淵と共に、京師四大画家と称された。年に６００点以上制作。

１９５４年（91歳）、「斉白石絵画展覧会」が開催された。

１９５６年（93歳）、世界平和理事会より国際平和賞金を受ける。

１９５７年（94歳）、中国画院の名誉院長に任命され、９月16日、北京にて逝去。

葬儀委員長は郭沫若。葬儀には周恩来らが参列した。



絵画

斉白石「宋法山水図」1922年（59歳）171.8×89.9㎝
紙本墨画　京都国立博物館蔵

桂林の風景を基にした山水画。
この頃から、白石は個性的な独自のスタイルの作品をどんどん描きはじめた。

優れた友人たち（特に陳師曾）のおかげで、斉白石は世界的に知られるようになり、作品も高く売れるようになった。生活も安定し、創作に専念できるようにはなったが、大多数の保守的な北京の人達には、学歴もなく、もと木工職人であり、貧農出身の白石は、なかなか認められなかった。「宋法山水図」の2年後に描かれた「桂林山図」の題詩で、白石は、その苦悩に満ちた胸中をつぎのように書き残している。

「他人がやれ荊浩だ、やれ関同だといっているのを聞くと恥かしくなる。絵の流派を誇って自らの才能を自慢しているのを見ると恥ずかしくて汗が吹き出してくる。自分はこうした連中と違って、胸の内に、天下一の高い境地を備えているのだ。年をとり、天下の奇観として名高い桂林の山も存分に見尽くしているのだから。」（「桂林山図」題詩より・１９２４年）

斉白石「清湘嘉景」軸
131×51㎝

斉白石「松屋閑趣」1925年
紙本　軸　148.5×46㎝

斉白石「延帆破浪図」1925年

当時の世間一般の伝統的な山水画観は写実よりも、写意を重んじた。

意とは、画家の心中に思い描かれた理想の風景のことである。よって、「書画は人なり」で、優れた人のみが、鑑賞にたえうる作品を描けるのだ、と考えられていた。その優れた人とは、学問があり、詩文に優れ、高い教養のある人物のことである。そのような人物は、身分が高く、良家の出身でなければならないと考えられていた。よって、俗人は、作品の良し悪しをみないで、作家の身分や生まれ素性で作品の価値を判断した。救い難い！

古代の大家や権威のものまねばかりして、個性も独創性もない俗人作家は、独特の白石の作品を古代の大画家の作品と比べて、おかしなところがあると批判した。

斉白石「貝叶草虫」軸

斉白石「秋荷蜻蜓（せいてい）」部分

斉白石「秋荷と蜻蜓」
紙本　39×28 cm

斉白石「秋荷蜻蜓」部分

斉白石「花卉草虫」　団扇　直径 24.5 cm
裏に篆書で「人長壽」

斉白石「花と蝶」扇面　紙本　款：白石老人　印：木人

斉白石「三魚図」扇面　1938 年　紙本 13.5×36.5 cm

斉白石「貝叶草虫」　蝉とバッタ

初めは胡沁園（こしんえん）先生に工筆画（こうひつが）を学んだ。西安から帰ってからは、写意画に改めた。画の題材は日常よく見かけるものを多くした。私の画に対する見解に賛同してくれたのは、陳師曽が最初の一人であり、その他には瑞光和尚と徐悲鴻ぐらいのものであった。（『自述（じじゅつ）』より）

※「工筆画」は。「密画（みつが）」とも呼ばれ、対象を緻密に表現する。中国絵画は大別すると「工筆画」と「写意画」に分かれる。

「画に大切なのは、似ることと似ないことの間にあるのだ。写実に過ぎれば、俗に媚び、ついに精神を伝えることは出来ないのである。」（斉白石が梅蘭芳（メイランファン）に語った言葉）

この言葉は白石の画論を集約していると同時に「演じる」ということの本質に通じた言葉でもある。

「書画も演技も一様」（梅蘭芳の言葉）

斉白石と梅蘭芳

梅蘭芳（メイランファン）（１８９４～１９６１）

京劇俳優。女形で名高い。書画を愛好し、蒐集するだけでなく自ら書いた。

呉昌碩や斉白石らから画の手ほどきを受け、斉白石の弟子にもなった。

自叙伝『業余愛好』がある。

斉白石「魚」軸　紙本
135×34 ㎝

斉白石「群蝦（ぐんか）」軸　紙本
1947 年　101×33 ㎝

斉白石「蟹図」軸　1947 年
紙本　68×35 ㎝

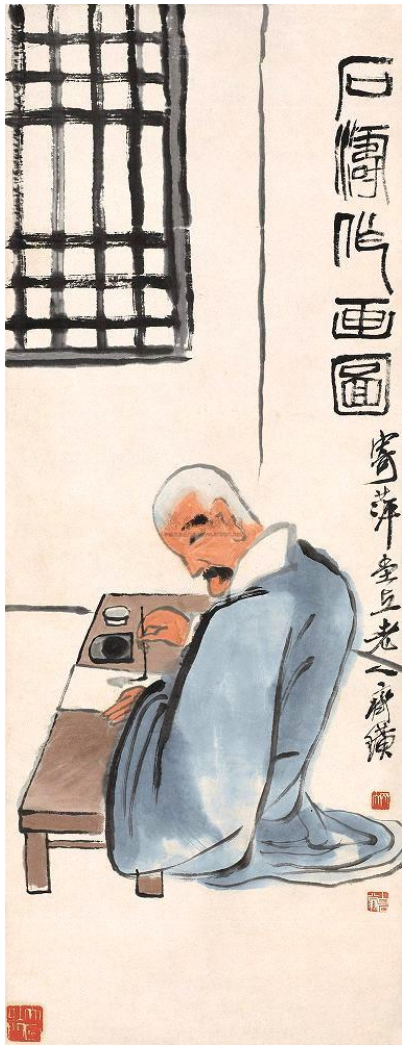
斉白石「南瓜に螳螂（とうろう）」軸

斉白石「松鼠枇杷（リスびわ）」軸　100×33 ㎝

写意水墨の系譜は、沈周→徐渭→石濤→揚州八怪→ 呉昌碩、斉白石。

白石は晩年、八大山人・石濤・徐渭を慕い、呉昌碩から最も強い影響を受けたと述べている。

「徐渭・八大山人・石濤の三人は、能く画面に縦横に溌墨させ、私はその画技に心から敬服している。残念なことは生まれるのが三百年遅かったことだ。（生まれていれば）あなた方の為に墨を磨り、紙を整えたであろうに。もし受け入れてくれなければ、門の外で餓えても立ち去ることはないだろう。これも愉快なことではないか」



斉白石「石濤作画図」紙本　軸
89.5×34.5 ㎝
鈐印：斉大、白石翁、大匠之門。
題識：「石濤作画図。寄萍堂上老人斉璜」

斉白石「東坡先生玩硯図」紙本　軸
89.5×34.5 ㎝　鈐印：木人、白石翁
悔烏堂、梦想芙蓉路八千
題識：「平生君最軽余子、余子何嘗不薄君。若以才華作公論、此翁随處合孤行。舊題東坡図句。白石老人。」

斉白石「陶淵明采菊図」紙本　軸
97×35 ㎝　款識：白石齊璜
鈐印（けんいん）：老苹　収蔵印：帳宗憲蔵

斉白石「群鶏」軸　1947 年
101×33 ㎝

斉白石「柳枝」軸　牛

斉白石「鷹」独立　軸
133.8×33 ㎝

斉白石の独創である「紅花墨葉」は、民間芸術と伝統的な文人画を融合させたものである。

斉白石は呉昌碩と共に、伝統的な水墨技法を用いる「国画」の中心的芸術家である。彼等はまったく欧米の影響を受けていない。

斉白石　「周舊邦」1954年　紙本　137×68㎝　題識：九十四歲斉白石書　印：斉璜之印、悔烏堂

※「周旧邦」は詩経の大雅文王篇の一節「周雖旧邦、其命維新」（周は旧邦なりといえども、天命維れ新たなり）からの引用。「維新」は天命の更新のこと、つまり革命の意。

斉白石　「百華斉放」1954年　81×23㎝　題識：九十四歲斉白石　印：悔烏堂、借山翁

初めて習った字は、館閣体（朝廷の公式な標準書体）、その後、何紹基風の書を学んだ。篆刻を学ぶために鐘鼎文や篆隷を習った。つづいて趙之謙を学び趙風の印を刻した。北京では魏碑を学ぶようになり、「爨龍顔碑」を臨書しはじめた。（『自述』より）

※「爨龍顔碑」
南北朝時代、南朝の宋で458年に建立された墓碑。

※「鐘鼎文」
殷、周時代の鐘鼎の銘に書かれている古文。金文のこと。鐘鼎とは「つりがね」と「かなえ」のこと。

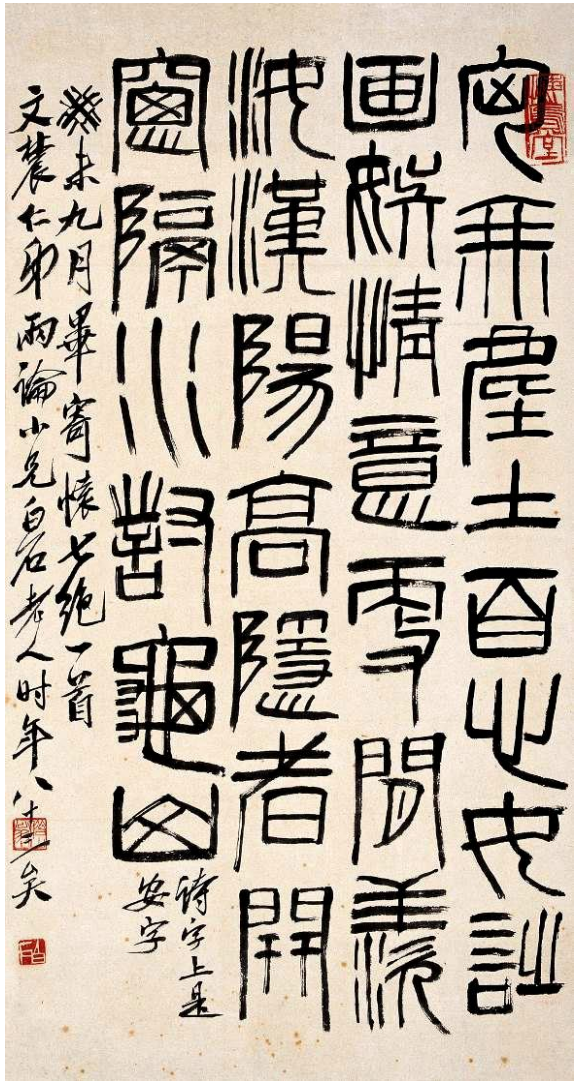
※「百花斉放」
いろいろの花が一斉に咲き開く意。1956年の中国共産党のスローガンの一つ。文学・芸術を花にたとえている。

斉白石「篆書五言対聯」1935年　134×33㎝×2
「漏臾造化秘・奪取鬼神功」
題識：悲鴻先生　甲戌十二月之初撰語。乙亥正月中書。齊璜。
鈐印：老白。故郷无此好天恩

斉白石「篆書対聯」1924年　紙本　175×31㎝
「食叶春蚕應抽芳繭・着花老樹自无醜枝」

斉白石「楷書四言対聯」1953 年　個人蔵

「蛟龍飛舞、鸞鳳吉祥」



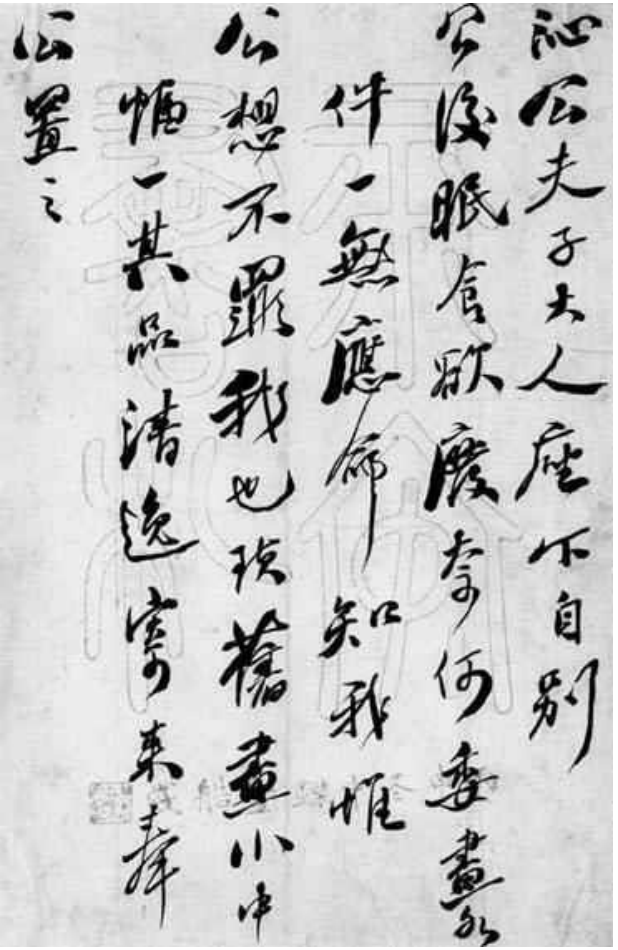
斉白石「篆書七言詩」1945 年頃　紙本　90×45.5 cm

「胸無塵土百心安、詩画娯情意更閑。
　羨汝漢陽高隠者、開窗隔水対龜山。」

斉白石「篆書五言対聯」軸　紙本　183.1×45.4 cm×2
台北故宮博物院蔵
.「群持山作壽・常与鶴同儕」
「祀三公山碑」「天発神讖碑」の影響がみられる。

※「天発神讖碑」三国時代の呉の顕彰碑。276 年以降建立。篆書碑

斉白石「行書軸」



斉白石「手札」行書　※「手札」は自筆の手紙のこと。

※「祀三公山碑」
後漢時代、117年に建立された篆書碑。

斉白石の行草書は、呉昌碩と同じように、右上がりが強いが、逆入平出ではない。彼の篆刻と同様、切り込んで、グイグイ彫り進むような勢いがある。また、彼の印影や絵画と同じように、カッと輝いて見える。

斉白石「行書軸」1939年　紙本　33×16㎝

「廿八年十二月初一日起、先来之、憑単退、後来之、憑単不接　本室主人」

印：白石翁

斉白石「松樹千歳」隷書　紙本　軸　118×40㎝

「有所不為齋」3.7×1.7×7㎝
側款：「虎翁正刊」「白石」
寿山石

「余舒之印」寿山芙蓉石　螭鈕
辺款：沙園君正　丙子白石
※「螭」とは中国の伝説上の霊獣。

「中国長沙湘潭人也」

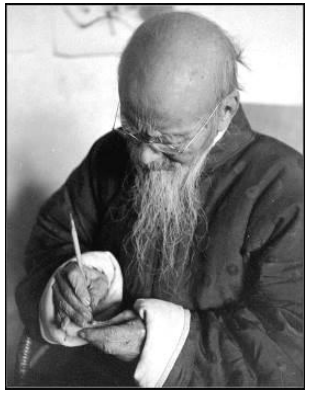
「曾経霸橋風雪」

篆刻は最初、浙派の丁敬・黄易を学び、その後、『二金蝶堂印譜』を鈎摹し趙之謙の筆意を学んだ。つづいて、「天発神讖碑」を見て刀法を一変し、「祀三公山碑」を見て篆法を一変した。最後に、秦の権量銘の縦横平直、自然なさまを喜び、一大変化をした。刻印は布字をせず、一刀でしあげ、書法と同じく、決して刀を重ねない。私の刻法は一刀で、二方向があるだけだ。私の取りえは、筆力があるということだけである。（斉白石の『自述』より）

一般的な用刀法は双入刀法だが、斉白石の白文印の用刀法は単入刀法で、下から上に衝刻する。結果、線の片側がギザギザになる。斉白石の独創である。章法は線の正斜と疎密の変化により、バランス良く構成されている。

斉白石は古人に重きを置かず、成法を無視したので、多くの専門家が彼の作品を邪道で、でたらめなどと誹謗し、「自己流の篆書」を作った、と悪口を言った。しかし、彼は「人、之れを誉むるも一笑し、人、之れを罵るも一笑す」と批評を省みなかった。

彼は、「即ち古法は捨て去る可し」「余は古を摹するを喜まず」などと言い、彼の作品は、前に古人無しのようにみえるが、彼は熱心に詩文を学び、古画や、名筆や漢印を模写し、それらの影響を受けている。また「師法は短を捨つ」と言い、伝統や権威にとらわれず、自由で天真爛漫で個性的な作品を創造した。



印を刻す斉白石

「漁翁」

「白石」

「借山門客」

「齊大」

「天涯亭過客」

「悔烏堂」

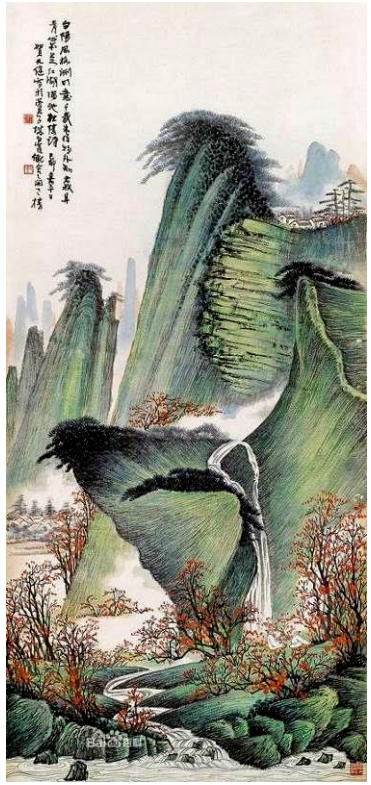
「石墨居」

「人長壽」

呉湖帆「行書七言対聯」

呉湖帆「廬山東南五老峰図」1958年
中国美術館蔵

賀天健「行書七言対聯」



賀天健「青緑山水」

于右任「草書　五言対聯」紙本
134×33㎝×2「心積和平氣、手成天地功」

于右任（1879～1964）

陝西省三原の出身。政治家、書家。名は伯循、字は右任、号は髯翁、騒心、太平老人など。

「石門頌」や「龍門二十品」を学んだ。草書が得意。

1906年、日本に留学し中国同盟会に加入、翌年帰国し、上海で『神州日報』などを創業し革命運動に参加。

1922年、上海で国立上海大学を創設し校長となった。1924年、国民党の中央委員に選出された。

1949年、台湾へ逃れた。

賀天健（1891～1977）

江蘇省無錫の出身。書画家。名は駿。字は炳南。17歳から天健を名のった。老年には健叟と名のる。

唐代からある青緑山水の技術の復興こそが西洋の油画に匹敵するものである、という信念を彼は持ち、その再生のために頑張った。

『画学月刊』『国画月刊』を発行し、国画の現代的復活のため活動した。

書は「張猛龍碑」「張黒女墓誌」「龍門二十品」などを学んだ。

呉湖帆（1894～1968）

江蘇省蘇州の出身。名は万、号は倩菴、丑簃など、斎名は梅景書屋などがある。呉大澂の孫。

書画家・鑑定家・大コレクター。

祖父の呉大澂や四王の真筆から画を学び、書は董其昌の真跡を深く研究した。篆刻は独学。

上海で正社書画会を創立し、梅景書屋で画法を教えた。

絵画作品は、中国伝統の青緑山水を深めた作風である。

著書に『丑簃談芸録』がある。

先祖代々の1400点ほどの収蔵品で、真跡を研究し、書は羊毛筆と生紙を使って臨書するようになってからだめになったと唱え、熟紙と剛毛筆での臨書を薦めた。